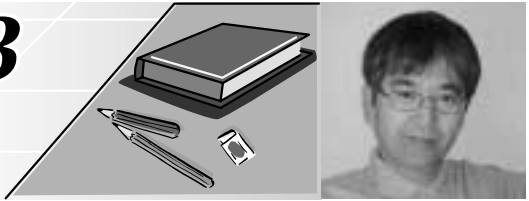


学生時代と図書館 63

贅沢な時間と場所

田中 道治



決して図書館の模範的な利用者ではない私が、このタイトルで思い出を語ることに幾らか躊躇はありますが、これまで数回、図書館（図書室）を頻繁に利用した時期があったことは事実ですので、そのなかの二つの時期の思い出を少し書かせていただきたいと思います。

私の両親は二人とも中学の教員で、私が幼い頃、父親は当直として学校に寝泊りしたり、母親は日曜日の日中、不時の事態に備える目的で学校へ出かけることがありました。私も小学生中学年の頃までよく母親について学校へ行き、そこで宿題をしたり、本を読んだりしていました。その場所が多くは図書室だったのです。小学校、中学校が同じ場所にあったため、図書室も壁を隔てて同じ校舎内にありました。そこには母と私だけで、近くの子どもたちが運動場へやってきて遊ぶ声が聞こえることもありましたが、冬などは静寂そのもので、耳に入る音はストーブの上に置かれたヤカンからでる蒸気の音だけでした。図書室の古い本の匂い、広々と、整然とした空間、そして静寂、子どもながらにその非日常的な時間と空間はある種の快感であったように記憶しています。

その後、特に本好きでもなかった私にとって図書館はあまり縁のない場所でしたが、大学へ入るとその関係も一変しました。お金はないが時間には恵まれた環境で、他にやることもあまりなく、授業の時間以外は大学の図書館が、学生読書室で過ごす毎日でした。私が通っていた大学は、規模も大きく歴史も古い学校だったので、図書館本館、分館以外にも、いたるところに学生用の図書室がありました。本館にはあまり通った記憶はありませんが、学生読書室と呼ばれていた学部の図書室には毎日のように通っていました。図書室に入ると、真ん中に仕切りのある、横に長い机が整然と並べられていました。私の定席は入り口から向かって右端の奥の席で、不思議にその席はいつ行っても空いていて、そこで新聞を読んだり、古本屋で買った本を読んでいた。図書館を頻繁に利用すると気づくことですが、いつも同じ時間帯に同じ席に座っている人が何人かはいるものです。その頃もそうでした。大学時代の最後の年を迎えるまでの図書館との関係は、居心地のよい、自分だけの時間が持てる場所としての付き合いだったと言えます。4年生になり、少し面白い卒論を書いてみようと思いつき、図書館との真面目な付き合いがはじまりました。学外の幾つかの図書館にも出かけ、目的を果たすだけでなく、各図書館が持つ設備や機能・サービスの違いを目にするのも興味深いものでした。この頃から私の図書館との関わり方に変化があったように思えます。4年生の夏休みに度々足を運んだのは最高裁判所正面にある国立国会図書館です。卒論を書くために英国、米国、日本で発行されている代表的な英字新聞の、ある時期に書かれた記事が必要になり、その時期の記事すべてがマイクロフィルムに収められた国会図書館へ通う日が続いたのです。マイクロフィルム閲覧用の機械で求めるものを確認し、コピーサービスの申し込みをして帰るといって単調な作業の繰り返しでしたが、厳かとも形容できる雰囲気の中で適度に緊張感もあり当時の自分には新鮮な感覚でした。

今は、コンピューター検索で必要な本を探し、借りに行くだけの場所となってしまいましたが、私にとっての理想的な図書館は、英知（情報）の宝庫としての存在はもちろんですが、長い時間を過ごしたくなるような場所、煩雑な日常とは異なる贅沢な時間、空間を提供してくれるところです。大学生時代に無目的に通っていた図書室は、豪華ではありませんでしたが、一番居心地のよい場所であったことは間違いありません。

たなか みちはる（准教授・日本語教育・日本語学）